

## 日本医療政策学会 設立キックオフシンポジウム概要

【日時】 2024年6月25日（火）16:00-18:30

### 【議事次第】

- ・開会挨拶—学会設立経緯と趣旨について
- ・学会理事/監事のご紹介
- ・基調講演1（武見敬三氏）
- ・基調講演2（横倉義武氏）
- ・基調講演3（黒川清氏）
- ・パネルディスカッション「EBPM および実践に向けての課題」（桜井なおみ氏/ 迫井正深氏/ 中室牧子氏/ 堀井貴史氏/ 坂元晴香氏/ 乗竹亮治氏）
- ・閉会挨拶—喫緊の政策課題と学会の展望（西村周三氏）

### 【概要】

初めに、学会理事の後藤励 慶應義塾大学教授より [学会設立経緯](#) について説明がありました。「日本医療政策学会」は、医療政策学の研究者および政策立案者を広く糾合し、医療政策研究の活発化および「エビデンスに基づく政策立案（Evidence based policy making; EBPM）」の推進を図るべく設立されました。医療政策研究の研究成果の発表の場として、医学に加え経済学、政治学、統計学、社会学、経営学、倫理学などの複数の学問領域の専門家・研究者および政策立案者がエビデンスを共有し、意見交換し、交流する場となることを目指します。ひいては、その学問的成果に基づく EBPM の実践が行われ、質の高い医療・介護が提供され、医療・介護費の適正化に貢献することを期待するものです。

予定している具体的な活動内容についても説明がありました ([こちら](#))。特に今年度～来年度は若手研究者へのセミナーやニュースレターの発行を行い、2025年には第1回の学術集会を慶應義塾大学にて開催予定です。大学・行政・企業などにおいて医療政策の研究および実践に関わっている関係者の方で、われわれの設立趣意に賛同する方の積極的な参加を期待しております。

続いてご講演を、武見敬三 厚生労働大臣、横倉義武 日本医師会 名誉会長、黒川清 日本医療政策機構 代表理事、西村周三 京都大学名誉教授より頂きました。喫緊に取り組む課題として、医療 DX・危機管理体制の構築・創薬基盤の強化・グローバルなコンテキストでの政策形成が挙げられ、特にグローバルなコンテキストでの政策形成については、社会課題先進国としての日本の知見を海外、とりわけ今後高齢化が見込まれるアジア諸国に展開していく際の当学会が果たす役割について期待が示されました。さらに、少子高齢社会の課題を有限の資源のもとで改善していくには、医療 DX やタスクシフティングなどの政策

を、国民の十分な理解とともに地域の実情に応じながら進めていく必要があります、その中で学会が果たす役割についても言及されました。また、EBPM に沿った政策適用の暗黙の前提には民主主義社会の存在があります。成熟した民主主義においては、「なぜ？」と絶え間なく問い続ける作業が重要であり、関係者と対話し、多くの方に関心を抱かせ、そして共感の輪を広げる過程に当学会が関わっていくことへの期待も示されました。学会の学術活動のあり方については、過去の取り組みも踏まえた具体的な提言もいただきました（例：議論の場としての投書欄）。ジェネラリスト医師の教育体制のあり方についても議論がありました。

講演後のパネルディスカッションでは、EBPM の重要性と課題について、様々な視点から意見が出されました。具体的には、以下のような議論がありました。

- EBPM における数字とナラティブ両方の重要性
- ナラティブを含む Evidence-based アプローチの限界への配慮の重要性
- 継続的な提供が求められる医療におけるエビデンスの可変性への対応
- 政策決定で研究者と行政の重視するものが異なること、エビデンスの位置づけの違い
- 民間企業で出来るデータ分析からの発信可能性

これらの課題に対し、学会への期待として、コミュニケーションの活性化、人材育成、独立・中立的なエビデンス提供、異分野間のコラボレーション促進、組織をまたいだ人材育成 (revolving door)、透明性のある議論の場の提供が挙げられました。特に行政と研究者の revolving door への期待と、その場としての学会の重要性が何度も強調されました。

本シンポジウムには 300 名以上の方にご応募頂き、会場には約 100 名の多様な背景の方々にご来場いただきました。質疑応答の中では、当学会が果たすべき役割についても多くの意見を頂き、活発な議論が行われました。この場を借りて参加者の皆様に御礼申し上げます。

